



# 会報 JAMT

JAPANESE ASSOCIATION OF MEDICAL TECHNOLOGISTS

発行所  
 社団法人日本臨床衛生検査技師会  
 発行責任者 高田鉄也  
 編集責任者 高田鉄也  
 金子健史  
 〒143-0016 東京都大田区大森北4丁目10番7号  
 TEL (03) 3768-4722 FAX (03) 3768-6722  
 ホームページ <http://www.jamt.or.jp>

## 新執行部誕生！

平成 22 年 3 月 27 日 (土) に開催された、社団法人日本臨床衛生検査技師会平成 21 年度第 2 回定期総会において、新執行部が誕生した。新執行部は、会長推薦理事を含み 35 名体制となり、同会初めての大型執行部となる。先の選挙戦における会長はじめ副会長の立候補趣旨には、新しい法人法による公益認定をはじめとする長中期的展望にたった事業方針が盛り込まれており、今後の執行部の動きが注目される。

### 臨床検査…医療文化としての伝承を！

会長理事 高田 鉄也

生物界は、人をはじめ、動植物から微生物まで多種多様ですが、その異なる中に、我々は共通なものを認めます。

生物を無機物と区別するものであり、動物や植物を共通の概念、すなわち「生」に含ませるものであり、それを「生命」と呼びます。その生命の本質は何にあるか？それを求めるには生命の起源が重要な問題となります。

我々の住む地球の年齢を、前惑星雲の形成を起源とすると実に 50 億年以上になります。やがて、最古の海に誕生した“生命”は、生物の最終的進化とも云える人間を生み現代に続きます。

人間は生物学的において本質的に変わってはいませんが、周囲の自然界に権力＝人はそう呼ぶ＝を獲得しました。それは社会的な進化の結果であり、生物進化ではありません。人間の進歩は個体の生物進化ではなく社会的生活の進歩により形成されるものです。人間社会は、生物学的進化の止まった「人間」が「人」の生命を操るといふ暴走的な変貌を遂げました。最古の海に誕生した“生命”から見ると、生命の進化を人間で止めた意図が失われることに繋がるものかもしれません。

「地球上の生きとし生けるものは死をもって繁殖の代償を得る。」これは、人間が創造される前の「神」の言葉と言われます。

生命に死が訪れる様になったのは生命誕生から 10 数億年経過してからであり、細菌の様な無性生殖生物は分裂を繰り返す「老化」もない不死の世界です。同じ単細胞生物でも、細菌の様に細胞の中に DNA を裸で持つ原核生物と異なり、真核生物は核やミトコンドリアを有し、その中に DNA を持ちます。彼らは、同様に分裂により増殖するが真核生物のある種は「接合」を行い、遺伝子を交換します。これにより老化を止め、若返る訳であります。生命の再生と永久の生命は存在しないという神話を科学が解明した訳であり、遺伝子により運命づけられていた「死」のはじめであり、有性生殖生物にのみ訪れる必然の結果と言えます。

このように、生物の生活内容は、種の存在を維持し発展させることにあると云えますが、生活のために必要とするものを如何にして獲得し、自己そして子孫を創る問題は重要な課題です。それが生物生産=Biological production=であります。生物生産の終末は個体数や量がどの様に増加したかで表現されることが多く、その測度のひとつとして重要なものは、生産速度と言えます。

鮭は秋～冬に産卵し、春に孵化し遊泳生活に入り、殆どのものは海に入りますが、一部は 1 年を経過した後に降海します。更に、

帰るのを待ちます。これらはプランクトンを主とした餌をとりませんが、一般にえさの量が増加すれば生存率は高くなります。しかし、成長効率を加味すると「無駄遣い」という問題が生じ、これらの生産問題を考える時、種自体の持つ発育段階が明らかにされなければなりません。生物が進歩を遂げる場合生活様式の相違が問題とされますが、生活様式が変化する必然性は追求されてはいません。発育に伴う変化と共に、固有の生活周期=cycle of life=を持ちますが、それも環境の構造により大きく影響されます。この様な生物の生活内容は、いかに進化を遂げても基本的にはその習性は大きく変わる事は無いとされ、単細胞から魚類、昆虫類、哺乳類に到る「生命」に共通する課題と言えます。人間医療においても、すでに生命倫理を論じる段階にありますが、これら生物の基本的生活を基本として考える事が必要です。

20 世紀は「激動の世紀」、一方では「科学技術の世紀」と云われ、人間の科学は宇宙の果てからミクロの世界、遺伝子まで解明しました。これらは人の生活は勿論、国のあり方をも変える力を持つ結果となりました。その結果、前世紀に破壊したものの、失ったものを新世紀に取り戻そうとした動きが見られます。それは、本来

臨床検査…文化としての伝承  
 =いつでも、どこでも臨床検査=

の人としての人間再考と考えます。農業中心の社会から工業社会へ、そして、情報型の社会へと大きく変貌を遂げ、より広い世界観でとらえなければ確実に取り残され、異なる文化、宗教、人生観等を互いに尊重し共存しななければならない多元的な時代となりました。その結果、ひとつの文化で統制することは不可能な時代と言われます。医学の世界においては、脳死や体外受精等生命倫理に関する問題と真剣に向き合う時代となり、技術は止まるところを無視した速度で進んでいます。このような時代であるがゆえに、古き良き時代を踏襲する日本的感覚(日本の文化と言った方が正しいかもしれない)も貴重なものであります。

医学(医療)を単に生命科学として論じるのではなく、文化、宗教、人生観等を含めた哲学的思考、すなわち「人間」として、「生命」として考えなければなりません。我々は、医療に身を投じた検査技師です。医療への貢献を基盤として、後に続く二世達に伝えていくことも大きな使命のひとつです。

医療を通じ、「いつでも、どこでも臨床検査」を提唱・普及し、「世の中を動かす「検査技師」として、更に、「臨床検査を医療文化として伝承」するよう、「成熟した検査技師を育成」する機能団体としての組織を構築します。

…具体的戦略構想は、次号以下でお話します…